

サマセット・モームの英語

四方田 敏

内 容

- 1 序 文
- 2 文体について
 - (1) 描写について
 - (2) 比喩表現について
 - (3) 語句の表現について
 - (4) 語法について
- 3 むすび

1 序 文

サマセット・モームは通俗作家であると一般に言われている。たしかに通俗作家であることに間違いはないと思われるが、この場合通俗が卑俗に通ずるということでは決してないと思われる。モームは常に彼なりの積極的な問題意識を持って文学に対していたとすることができると思う。それは彼の書いた長篇小説「人間の絆」にしても、「お菓子とビール」にしても、又、「かみそりの刃」にも、それぞれ問題意識が表われているのである。中野好夫氏がモームの文学を評して「モームの作品は一切の通俗性という皮をはぎ取ってしまった最後に人間の不可解性という常に最後の核に打つかるのである」と言われているが、全く言い得て妙であると思われる。又モームはよく作品中に「私」という一人称の人物を登場させて物語る形式をとることがある。これは「物語りに真実らしさを添えるための技巧」であるのであるが、モームはこの真実らしき、事実性ということにかな

り腐心していたような様子が見える。彼は「かみそりの刃」という小説の第一章で次のように述べている。「この作品の人物がアメリカ人であろうなどとは毛頭考えない。あくまでイギリス人の眼を通して見たアメリカ人であり、例えばアメリカ人独特の言葉癖を、そのまま写そうなどとは少しも考えなかった。スラングが大きな障害になるのであり、ヘンリー・ジュームズは彼のイギリスものの小説の中で、スラングをよく使っているが、決してイギリス人のようにうまく使えないのである。だからねらった効果をあげるところかしばしばイギリス人の読者に不快な違和感を与えるのである」と。つまりモームはこの作中人物のアメリカ人をイギリス人である彼が描くなどということは困難であるという不安に苦しんでいるのである。まして本の中で真実らしさを与えることは異邦人である彼の観察を通しては難かしいと正直にその悩みを告白しているのである。現に「かみそりの刃」の中でアメリカ青年ラリーがしゃべる言葉の中にはアメリカニズムでないものが見られる。例えば *he proposed that we should play for the beer.* とか *he proposed that we should play for money.* という英語である。この場合アメリカ英語では普通 *that*~*clause* の中の *should* は使われず仮定法現在が用いられるのである。又モームは彼の「作家の手帳」の中で次のように興味深いことを言っている。「小説家が直面する困難の一つは作中の人物の外貌をどのように描写するかということである。昔の小説家たちは作中人物の肉体の部分を非常に精密に列挙したが、若し読者か著者が苦心して描いた人物を実際に見たとしても彼だと分ると思えない。いかに言葉をつくしても、結果的に、われわれの胸に正確な像がつくられることは滅多にないのである」。これは言葉のむなしさ、言葉の具象性についての疑問を吐露したものであるが、これは又「作家の手帳」の中の他の箇所でもモームが言っている「作家のための心得、説明しすぎないこと」という言葉と共に、モームの文体を考察する場合の手掛りを与えてくれると思われるのである。扱て、この小論ではモームが1930年、彼が56歳の時、発表した長篇小説「お菓子とビール」をとり上げて見たいと思う。この小説もモーム好みの一人称で書かれた小説であって、モームの作品の中でもかの「人間の絆」と

並んで、他の作品、例えば「月と六ペンス」や「かみそりの刃」などと比べると、はるかに自叙伝的要素の濃い作品であると言ってよいのである。「ブラックステーブル」の彼の叔父や叔母の家、牧師補、牧師館の召使たち、医学生時代のロンドンの下宿屋、はにかみ屋の少年、これらはすべてモームが経験又は体験した事実である。そしてこのような事実性に基ついた真実性がこの「お菓子とビール」という小説に生气を与えていることはたしかであると言える。モーム自身出版社ハイネマンの社長とのテレビ会見で「お菓子とビール」が彼の小説の中で矢張りもっとも気に入っている作品であると語ったと言われている。又批評家たちもフランスを除いてはすべてこの小説をモームの最高の作品とみなしているのである。扱ってこの論文ではこの異色ある作品を文体の面から考察する積りである。

2 文体について

(1) 描写について

この「お菓子とビール」という小説の中では、ロウジーという女に対する人物描写に興味がかれる。始めは彼女の肉体的外貌について描写されている。鼻は短かく、眼は小さく、口は大きい、眼は青く、唇は肉感的であり、顔の色は非常に渋い膚色で、髪は金髪という工合に外貌は描かれている。そしてそれからあとは主観的色彩にいろどられた描写へと移行してゆく。先づ英語の原文を引用しよう。

She glowed, but palely, like the moon rather than the sun, or if it was like the sun, it was like the sun in the white mist of dawn, それから She stood like a maiden apt for love offering herself guiltlessly, because she was fulfilling the purposes of nature, to the embraces of a lover. という描写がつづけられている。始めの描写は、「彼女の放つ光は白く、朝霧を通して見た太陽のようである」というような非常に感覚的な印象的なタッチで描かれている。そしてあとの方の描写は「大自然の目的を実行しているという気持で、悪びれずに恋人の抱擁に身をまかせる」という様なやや観念的な描写を交える描き方

をしていると言える。そして、更にロウジーの描写はつけ加えられる。the strange thing was that this gold did give one a strange moonlight feeling. She had the serenity of a summer evening when the light fades slowly from the unclouded sky. There was nothing dull in her immense placidity; it was living as the sea when under the August sun it lay calm and shining along the Kentish coast. 「陽の光が雲ひとつない空からゆっくりと薄れていく夏の夕暮れのような落ち着いた感じが彼女にはただよっていた」矢張り印象的な手法で描かれている。「八月の太陽の下、ケント州の海岸に沿って静かに光り輝いている海のように生々としていた」。ここでは絵画的な具象的な効果を重ねるような描き方になっている。それから最後に She reminded me of a sonatina by an old Italian composer with its wistfulness in which is yet an urbane flippancy and its light rippling gaiety in which echoes still the trembling of a sigh. という文で終る。「哀愁をたたえた中にも都会的な軽薄さがあり、軽やかにさざめく陽気さの中にも慄えるためいきがひびく、小奏鳴曲」にロウジーをたとえた描写などは音楽的な感覚による象徴的なスタイルになっていると言ってよいであろう。このようにモームはロウジーの描写ではいろいろ手をつくして描写を試みている訳であり、又モームの内面的情緒から深くとらえられているのである。又他の場所ではモームはロウジーを She gave herself as naturally as the sun gives heat or the flowers their perfume. のように淡々といかにも素直な表現で描写している。ロウジーに対する性格描写も個性的で見事である。

She was a very simple woman. Her instincts were healthy and ingenuous. She loved to make people happy. She loved love. She was naturally affectionate. When he liked anyone it was quite natural for her to go to bed with him. She never thought twice about it. It was not vice. It wasn't lasciviousness; it was her nature. これは会話の中の文であるから平明、端的であるのは当然であると言えようが、モームの文体は他の文に於いて

も決して難解な構文を含むような文体ではない。主語と述語の関係がはっきりして、分節の明解な文であると言ってもよいと思う。モームは「作家の手帳」に於いて彼自身の文体に関する考へを述べている。「Matthew Arnold's style. It is an admirable instrument for the presentation of thought. It is clear, simple and precise. It runs like a smooth, limpid river—with almost too tranquil a stream. If style resembles the clothes of a well-dressed man, which attract no attention, but when by chance examined are found seemly, then Arnold's style is perfect. It is never obtrusive, never by a vivid phrase or a picturesque epithet distracts attention from the matter; but when one scrutinises it, one discovers how carefully balanced are the sentences, how harmonious, graceful and elegant is the rhythm」又モームはマシューアーノルドの冷たい機械的とまで言ってよい簡潔なスタイルはほとんど想像の余地を許さないものだとして述べて感嘆しているのである。「お菓子とビール」の中の次のような文などは簡潔で的確な文になっているように思われる。「私」なる人物がとりとめもない過去の思いに耽けっていると、玄関にタクシーの止まる音がして、オルロイ・キアが入って来る場面の描写である。He came n, big, bluff, and hearty; his vitality shattered with a single gesture the i frail construction I had been building out of the vanished past. He brought in with him, like a blustering wind in March, the aggressive and i nescapable present. オルロイ・キアが三月の荒れ狂う風のようにきびしい、逃れようのない現在を持ち込んで来て、否応なしに「私」が現在へ引き戻される様子が生々と描かれていて面白いと言える。大体この「お菓子とビール」という小説は「私」という人物の追想を中心にして運ばれて行くのであって、その過去の追想と現在の事柄とが非常に巧みに織り合されて少しの隙もない点にすぐれた特色がある訳であり、上に引用した英文の一部は追想から現在へ立ち戻る時の描写である。それでは今度はこの私なる人物が、35年前の青年だった頃、ロンドンに出て来て住んでいた下宿先のおかみさんを訪ねて、かって自分が5年間過した部

屋をみせてもらって追想する場面の描写はなかなか勝れていると思われる。先づ I could not help feeling a pang as I thought of all the years that had passed since I inhabited that room, and of all that had happened to me. という文で始まる。そしてそのテーブルに坐ってわたしは御馳走のある朝食を食べ、つつましい昼食を食べ、医学書をよみ、最初の小説を書いた。その肘掛椅子にかけて、わたしは始めて、ワーズワースやスタンダール、エリザベス朝の戯曲やロシヤの小説などを読んだという追想に入り、それからその追想にさらに空想が加わってこの「私」が万感胸に迫る様子が生々と描写されてゆくのである。

I wondered who had used them since. Medical students, articulated clerks, young fellows making their way in the city and elderly men retired from the colonies or thrown unexpectedly upon the world by the break-up of an old home. The room made me, as Mrs. Hudson would have put it, go queer all over. 「私」はすっかり感傷的になる。更に描写はつつけられる。

All the hopes that had been cherished there, the bright visions of the future, the flaming passion of youth; the regrets, the disillusion, the weariness, the resignation; so much had been felt in that room, by so many, the whole gamut of human emotion, that it seemed strangely to have acquired a troubling and enigmatic personality of its own. I have no notion why, but it made me think of a woman at a cross-road with a finger on her lips, looking back and with her other hand beckoning. これは簡潔にして、きびきびと調子のよいモームの文体を示す一つの適例であると言ってよいと思われる。モームの文体はことさら重々しい修飾語句を使うわけでもなく、用語も比較的限られたものであって、従って、幾分単調であることは免れないけれども、たしかに、その書く文には流れというものがある。口語的リズムがある。次にその原文の一部を引用してみよう。

She twisted it (her hair), patted it, and put back the pins, and as she was intent on this her eyes caught mine in the glass and she smiled at

me. When she had replaced the last pin she turned and faced me; she did not say anything; she looked at me tranquilly, still with that little friendly smile in her blue eyes. The room was very small and the dressing table was by the bed. She raised her hand and softly stroked my cheek. しかし、このような流れるような描写はすぐ次に I wish now that I had not started to write this book in the first person singular. すなわちこの小説を一人称単数で書き出したことを後悔するという「私」の見解が始まることによっていきなり中断され、文のリズムもくづれてしまうのである。そして「私」の所見は（作者モームの見解でもある）一人称単数で小説を書くことの問題について、長々と「私」の講釈がつづけられるのである。いわゆる饒舌である。文のリズムをこわしてまでもしやべるのである。小説の形式というものを自由に考えたルーズな書き方になっている。このような文体が「お菓子とビール」の明らかな特徴と言えるのであり、又見様によっては欠点であると言えるかも知れない。又その外、この「お菓子とビール」の中で筆者の目を引いた特色ある書き方としては次のようなものがある。先づ原文をみてゆこう。

She was a pattern of propriety, and she would never have women in her house, you never knew what they were up to ('It's men, men, men all the time with them, and afternoon tea and thin bread and butter, and openin 'the door and ringin' for 'ot water and I don't know what all') これは彼女、つまり下宿屋のおかみさんの言った言葉「男、男、男、あの人たちはいつもそうなんですよ。そして、お三時はお茶と薄く切ったバタ付きのパン、それからドアを開けてお湯を持って来てとベルを鳴らしたり、とても何をするか分りやしませんよ」と云う言葉を直接話法にして、それを括弧でくくり、独白の形にして表現した技巧である。序でながらお湯を 'ot water と言っているのは明らかに cockney (ロンドン英語) である。下宿屋のおかみさんはロンドン子なのである。この外に、'If you don't get up at once you won't 'ave time to 'ave breakfast, an' I've got a lovely 'addick for you' という会話もある。周知の

如く cockney では発音の際 h 音が落ちるのである。この下宿屋のおかみさんは、この小説では勿論、脇役に過ぎぬのであるが「彼女は公園の水際にあそんでいるペリカンなどと同じように、わたしの青年時代の思い出の中にすっかり入りこんでしまっている」のでなかなか描写も生きているのである。例えばそのおかみさん自身の言葉をみてみよう。

「Don't talk to me about the country. The doctor said I was to go there for six weeks last summer. It nealry killed me, I give you my word. The noise of it. All them birds singin' all the time, and the cocks crown' and the cows moooin'. I couldn't stick it. When you've lived all the years I've in peace and quietness you can't get used to all the racket goin' on all the time」

田舎に居れば鳥は朝から晩まで囀っているし、鶏はときをつくるし、牛はもうもう鳴いてうるさくて死にそうだと言っているのはこのおかみさんのいかにもロンドン子らしい面影が躍如として居り、又ユーモラスな人物描写となっていると言えよう。

(2) 比喩表現について

次に「お菓子とビール」の中に現われたモームの比喩表現について少しく考えて見ることにしよう。モームはこの作品の中で三つの擬人的描写を用いている。

- 1) I have no notion why, but it made me think of a woman at a cross-road with a finger on the lips, looking back and with her other hand beckoning.
- 2) Winding roads that ran between the great fat green fields and clumps of huge elms, substantial and with a homely stateliness like good old Kentish farmers' wives, high-coloured and robust, who had grown portly on good butter and home-made bread and cream and fresh eggs.
- 3) there were two or three cinemas, and their, garish posters suddenly gave the prim street a dissipated air so that it looked like a respecta-

ble elderly woman who had taken a drop too much.

上に挙げた三つの文はそれぞれ擬人的表現を含んでいるが、なぞらえられた人間がみんな女であると言うことが共通して面白。1)は「私」が35年前下宿していた先の部屋を訪ねて追想する場面で、自分の住んでいた部屋を「十字路に立って唇に指をあて、振り返りながらさし招いている女の姿にたとえているのである。又 2) は楡の巨木を「良いバターと、自家製のパンととりたての卵ででぶでぶ肥ったケント州の百姓のかみさん」にたとえている。3) は往来の模様を「きちんとした中年の婦人がお酒を少々飲みすぎた」様子にたとえている。この中、特に、2) と 3) の描写はなんとなくユーモラスな所もあり、又モームの中にあるリアリティを暗示しているように筆者には思えるのである。この外、いわゆる擬人法表現として次のようなものがある。The dawn *ran to meet* us like a cat leaping up the steps. In the light of the candle, *struggling* now with the increasing day, it was all silvery gold: 次に直喩の中で面白いものを選んで示してみる。It (=beauty) is as simple as hunger. It would be rather like a dog in a manger to keep to yourself a whole lot of material that you have no intention of using. a dog in the manger とは犬がかいばが食えないので、牛にもそれを食わせまいとして、かいば桶の中にかんばったというイソップ物語の故事から来ている。天邪鬼という意味である。口語的用法で面白い表現である。(he) makes the best of us look like a piece of cheese.

詩人に比べれば一流の散文作家も一片のチーズの如くつまらぬ存在であるという意。その外、直喩の使用は「お菓子とビール」では女性の描写に多用されている。her manner was as soft as the summer rain. She was like a clear deep pool in a forest glade. She was virginal like the dawn. She was like Hebe. She was like a tea rose. Her lips were like spring flowers. 女性の描写であるから感覚的で印象的描写になっている。

(3) 語句の表現について

- ㊤ ish 語尾を有する形容詞が割に多い。

smallish, modish, rakish, peevish, largish, garish, churlish, kittenish, latish, lavish, stoutish, sluggish, skittish, caddish

⑥ フランス語の使用。モームの親仏精神を表わしていると言えそうである。

Vénus toute entière à sa proie attachée (愛着を感じて分捕品に身も心も献げつくすヴィーナス) entrée (魚と肉との間に出る盛り合わせ料理) le vierge, le vivace et le bel aujourd'hui (処女の如く, 命長く, そして美しき今日の日) Qu'est-ce que ça prouve? (それは何を証明するか?) un petit air (少しばかり〜の様子) pension (下宿屋) omelette soufflée (ふくらしたオムレツ) belles lettres (文芸) chemin de fer (鉄道) coup de grace (止めの一撃) soirees (夜会) desarmé (窮して) diamanté (ダイヤモンドをちりばめた) pâté (パイ料理) beaux (婦人の相手役となる男) je-une premier (二枚目俳優)

⑦ 口語(俗語)の使用「お菓子とビール」には口語が多く用いられている。

名詞 tart (不身持な女) mad-house (精神病院) sawbones (外科医) prep (予習) sweat (骨の折れる仕事) razzle (ばか騒ぎ) blue bag (わいせつな言葉) windbag (おしゃべり) swelled head (うぬぼれ, 思い上り) crony (親友) the limit (忍耐の限度, しまつに負えないもの) to-do (騒ぎ) cad (下品な男) bounder (無作法者) peck (軽いキス) eye-wash (べてん) fish (人, やつ) a pack of lies (うそ八百, 軽蔑的なニュアンスを表わす) wax (腹立ち) second wind (元気回復) side (もったいぶり) chum (親友)

形容詞, 副詞 down at heel (落ちぶれた) hefty (屈強な) bust (破産した) higgledy-piggledy (混乱して) keen (熱心な) rare (途方もない) down and out (落ちぶれはてて) blithering (途方もない) no end (大いに) cantankerous (意地悪な) fit (健康な) not half (少しも〜ない) jolly (とても) nasty (いやな) horrible, blessed (every blessed thing. 強意)

動詞 horrified (不快に感じる) blow (乱費する) touch (金をせびる) stick (がまんする) skip (逃亡する) bunk (逃げ出す) swot (がり勉する) fla-

bbergast (びっくり仰天させる) swank (見せびらかす) nobble (人を籠落する)

④ 慣用句の使用

in the running (勝算がある) go too far (言い過ぎる) full of beans (元気にあふれて) gone on (ほれ込んでいる) a hair of the (same) dog that bit a person. (二日酔いをさますための迎え酒) carry on with (〜と浮気する) fly out at (食ってかかる) call it a day (仕事などをおしまいにする) take a drop too much (酔う) do a person a good turn (人に親切をつくす) darken a person's door (人の家の敷居をまたぐ) push down person's throat. (原文) では we don't want your friends pushed down our throats all day long. (一日中、お前の友達のことばかり押しつけられちゃかなわんね) go with (男女が関係する) take...to heart (...を苦にする) set a person's teeth on edge. (歯を浮かせる) at a person's beck and call. (人の言いなりに) know one's way about (ある場所の地理に明るい) give a person the creeps (人をぞっとさせる) a lump comes into a person's throat (原文) では her reply made a sudden lump come to my throat (彼女の返事に思わず胸が熱くなるのを感じた) throw cold water on... (...に水をさす) between you and me and the gatepost (ここだけの話だが) for two pins (わけなく) peg away (せっせっと働く) meet trouble half-way. (取り越し苦労する) cut a person dead (人にそ知らぬ顔をする) shoot the moon (夜逃げする) meet a person halfway (〜折れ合う) the man in the moon. (月の中の人、架空の人) (原文) He says 'e knows no more about it than the man in the moon. (彼は月の中の人と同じくらいなんにも知らない。強意の否定を表わすと思われる) get in with (親しくなる) put oneself into a person's shoes (人の立場になってみる) (原文) It always helps you if you put yourself in other people's shoes. (その人の身になって考えるのが一番間違いないです) give a person leg up (人を

助けて困難を切り抜けさせる) set the Thames on fire (はなばなしいことをなして名をあげる) a cock and bull story (でたらめな話) (原文) She told him a cock-and-bull story about herself. (彼女は彼にでたらめな身上話しをした) have many claims on one's time. (いろいろな事に時間をとられる) (原文) he has a thousand claims on his time. (彼は用事がたくさんある) eat one's words. (恥を忍んで前言を取り消す) (原文) generally by the time the critic has eaten half a dozen oysters and a cut from a saddle of baby lamb, he has eaten his words too. (批評家も、カキを半ダースばかりと小羊のサドル(鞍下肉)の一切れを食べてしまう頃になると言葉まで呑みこんでしまったように、前言を取り消すのであった)。ここでは実際に食べる食事との関連でいわゆるしゃれとなっている。cut a person off with a shilling (人を勘当する) leave a person cold (人になんの興味(印象)を与えない) pop off (ぼっくり死ぬ) sweep the board (トランプに勝ってかけ金又は札を全部とってしまう。比喩的に全勝する) (原文) Barring accidents, by which I mean barring accidents, by which I mean barring some genius who suddenly springs up and sweeps the board,... (下略)
 (偶然さえなければ、という意味はつまり慧星のように現われて一挙にすべてをさらって行く天才が出なければ) sell a person apup (人に値打以下のものを売りつける) (原文) the public has been sold a pup too often to take unnecessary chances. (大衆は余り何べんもまがいものを掴まされたので不必要な危険をおかすことはない) miss the buss (機会を取り逃がす) cling (hang on, hold on) like (grim) death. (しっかりとしがみつく) kick a person in the pants. (人をひどくしかりとばす) come (fall, be) down on a person like a thousand of bricks (人をひどくしかりつける) (原文) I'd have the Henry James gang down on me like a thousand of bricks. (ヘンリ・ジェイムス党から猛烈にやっつけられそうだからね) put a spoke in a person's wheel (人のじゃまをする) wash one's dirty

linen in public (内輪の恥を外に出す) go queer (少し気が変になる) go it (さかんにやる, しっかりやる) in half a jiffy (すぐさま) take one's courage in both hands. (勇気をふるい起す) let in (だます) go the whole hog (徹底的にやる) scare a person out of his wits (人をびっくりさせて度を失わせる) drop...like a hot potato (or brick) (人, 物を惜しげもなく捨てる) (原文) She dropped him, but not like a hot brick, or a hot potato. (彼女は彼を捨てたことは捨てたが, それも草履のように, 或は鼻紙のように捨てたのではない) The cat jumps (形勢がはつきりする) eat out of a person's hand (人の言うなりになる) (原文) In a little while he was eating out of her soft hand. (まもなく彼は彼女の思う通りに動くようになった) warts and all (洗いざらい) (原文) It would be more interesting if you drew him warts and all. (彼の悪いところを何もかも含めて描きつくしたらもっと面白いだろう) get in on the ground floor (他より先んじる) (原文) It was out of the question then for Mrs Barton Trafford to get in on the ground floor. (まだその頃はバートン・トラファード夫人がもっとも有利な立場で取り引きをするというのはできない相談だった) turn a person's head. (人をのぼせ上がらさせる) make game of (～をからかう) near the knuckle (きわどいところまで, 風紀上取締りの制限にやっとなれない程度まで) (原文) She goes pretty near the knuckle sometimes. (時たま彼女の話はかなりきわどい所までゆく) talk one's head (のべつ幕なしにしゃべる) a tall order (できない相談) dot the i's and cross the t's (細かいところまで注意する) (原文) there 'no need to dot the i's or to cross the t's. (何もそう固苦しく四角ばることはないのだ) could have knocked a person down with a feather (人をびっくり仰天させる) a dog in a manger. (意地悪者) in the know (事情に通じて) (原文) She enjoyed the feeling it gave her of being in the artistic know. (自分が芸術界の消息に通じているという気持ちを楽しんでいた) ba-

rge in (押しかける) blow the gaff (秘密をしゃべる) a skeleton in the
 cupboard (内輪の恥) a flash in the pan (竜頭蛇尾) (原文) 'Oh, yes,
 they're the flash in the pans. (全くあの連中は線香花火みたいだったね)
 pull a person's leg (人をからかう) come off it (ばかな話などを止める)
 cut no ice with (…に効果がない) go to pot (破滅する) give one's eye-
 teeth (交換条件として、貴重なものを出す) be caught with chaff (主に否
 定文に用いられ、易々とだまされる) (原文) I'm too old a bird to be
 caught with chaff. (ごまかそうたってその手には乗らんよ) この慣用句は
 an old bird is not caught with chaff. 乃至は you can not catch old birds
 with chaff. という「諺」から来ているのであって、「諺」の意味はばかな鳥
 でなければもみがらでつられはしない(ばかなでなければ、つまらない手には
 乗らない) という意味である。モームの文も、この「諺」の変形したもの
 であることは明らかだが、モームの造った表現であるとは言えないようである。
 何故ならば「新クラウン英語熟語辞典」には Frederick the great was
 too old a bird to be caught with chaff. (フレデリック大王は古だぬきだ
 ったからやすやすとだまされはしなかった) という例文が出ているからである。
 この外、次のような二つの格言も慣用句として扱った。Pride goth be-
 forea fall. (おごるもの久しからず) Look after the pence, and the pou-
 nds'll look after themselves. (小銭を大事にすればひとりでに大金ができ
 る。すなわち小事をゆるがせにしなければ、大事は自らうまくゆく) The
 proof of the pudding is in the eating. (論より証拠) Genius is an
 infinite capacity for taking pains (天才とは努力の異名に外ならぬ) Jack
 of all trades and master of none (多芸は無芸) Evil communications co-
 rrupt good manners. (朱に交れば赤くなる) ragtag and bobtail (社会の
 くず) good riddance to bad rubbish (役にたたぬ人または物が(い)なく
 なって大助かり) 以上はモームの「Cakes and Ale」の中に出てくる特殊な意
 味を表わす慣用句と比喩的な意味を表わす慣用句とを中心にして列挙したも

のである。又 *barge in* のように動詞副詞の型の熟語は口語又は俗語用法のものばかりが例示してある。又モームの使用している慣用句には普通辞書が与えている型式とは少し変形しているものが若干あるが、これは上の記述で分かる通り、モームの原文を例示した訳である。例えば内外の辞書は共通して *in the know* の形を成句として示しているがモームは *in the artistic know* という表現を用いている。要するに「*Cakes and Ale*」には慣用句が多用されて居り、文体的に特色をなしていると言えると思われる。「*The Summing Up*」をよむとモームが慣用句を好んだ理由が明らかになる。これによるとモームは Fowler の “*Dictionary of English Usage*” を非常に有益で貴重な著作であるという意味の事を述べ、「Fowle は簡潔、率直、常識を好み、てらいに対しては我慢しない。彼は慣用句というものが言葉のバックボーンであるというしっかりした考えを持ち、きびきびした言い廻しを絶対に支持している」。そして又「慣用こそが唯一の試金石である。私は文法上正しい語句よりも、易しくて、飾り気のない語句を好む」と述べている。そしてこの「お菓子とビール」の文体はモームのこの考え方を忠実に反映したものであると言っても決して過言ではないであろう。

(4) 語法について

又モームの「お菓子とビール」には次のような標準的でない語法がいくつか見られる。

1) 関係代名詞の用法

I dare say a lot of them *as* blame her would 'ave been no better than what she was if they' d'ad the opportunity. (あの人を非難するたくさんの人だっても若しそういう機会があれば矢張り同じことだったでしょうよ)

この文のように *as* が関係代名詞 *who* の用法を持つのは俗語又は方言用法である¹⁾。

There wasn't a man who come in to 'ave a drink *what* she didn't carry on with. (配を飯みに来た男であの女と関係のなかった人なんて一人だっている)

かったでしょうね)。この文のように *what* が単一関係代名詞として、*that* と同じ用法を持つ場合も又、俗語、方言用法である²⁾。

2) 接続詞の用法

We came back from the hospital just *like* he said. (あたし達はあの人が書いている通り、病院から帰ってきました)

No, he was singularly calm. He was *like* he always was. (いや、あの人は妙に落ち着いていた。いつもと少しも変らなかった)。

これら接続詞としての *like* の用法は、俗語又は口語用法と考えてよいものである³⁾。

注

- 1) 英米語用法辞典, as. p. 110.
- 2) 新英文法辞典, Relative pronoun, p. 828.
- 3) OED. 新英和大辞典 (研究社)

3 む す び

今迄の説明で分かる通り、この「お菓子とビール」には口語や俗語又は慣用語がかなり多く用いられるという点で一つの特色あるスタイルをなしていると言うことができる。この作品を世に出した時、モームは56歳、つまり人生の酸いも甘いもかみ分けて、円熟した境地に達していた訳で、その様な落ち着きと、豊熟した常識がこのような口語的スタイルを生み出したのではないかと思われる。それからもう一つの特色として、モームはこの作品では括弧でくくった独白をさかんに使っているのである。例えば、She gave you the curious impression of having no bones in her body, and you felt that you pinched her skin (which of course my respect for her sex as well as something of quiet dignity in her appearance would have never allowed me to do) your fingers would meet. といった調子である。この独白によって「私」なる人物の心理や気持の陰が表わされて、文章により多くの陰翳を添える効果があるように思われる。これ

サマセット・モームの英語

もこの作品に於けるモームの注意さるべき文章スタイルと称してよいと思う。この外、プロフィも言っているように、この小説全般をみると話が過去のさまざまなエピソードに戻りながら、しかも明快さと勢いを失わぬという見事な構成を持っているということはたしかに言える訳でこれら三つの特異点がこの「お菓子とビール」という小説を異色あるものに行っていると言ってもよいと思われる。

参考文献

朱牟田夏雄編「サマセット・モーム」研究社

中野好夫編「モーム研究」英宝社

上田勤「Maugham」研究社

田中睦夫訳「モーム評伝」河出書房新社

John Brophy「Somerset Maugham」London: Longmans, 1958